

「聴き入る」ということ

教育研究所 所長 佐伯 胖

イタリアのレッジョ・エミリア市における幼児教育は国際的に高い評価を得ていますが、そこでの教育実践の中心人物のひとりであるカルリナ・リナルディは、レッジョ・エミリアの教育の特質が「聴き入ることの教育 (Pedagogy of Listening)」にあると言っています。これは「教え込むことの教育 (Pedagogy of Instruction)」の対極にある考え方で、子どもに対しなにかを「教え込もう」として向かうのではなく、徹底的に子どもに「聴き入ること」を大切にする教育です。

実は、子どもたちは本来「聴き入る」ことの名人なのです。周辺のモノ・コト・ヒトについて、「それらはそもそもどういうことなのか」、「どうでありたいのか、どうしたいのか」について、さまざまな情景を思い巡らせており、「ものになって考え、ものになって行う」(西田幾太郎) ことができるのです。ただそのように世界に聴き入ること—そこから、彼らの探究と創造的活動が生まれるのですが—を引き出すためには、おとな(とくに教師)が徹底的に子どもに「聴き入る」ことが必要なのです。

リナルディがあげている「聴き入ること」というのは、①まず、対象を尊厳ある固有の(個別の名前をもつ)存在とみなして、情感的交流(情感を伝え合い、情感を受けとめ合う)関係をつくること、②対象が「聴き入ってもらうこと」を求め訴えている存在であるとして、全身の感覚で対象を「感じ取る feeling for)」こと、③時計的時間を忘れて、対象が「語り出す」まで沈黙し、わずかな手がかりからもおどろき、感動、おもしろさを引き出し、さらなる未知への糸口(問いかけ、疑問の投げかけ)を見つけ出すこと、④なんらかの真実性、美しさ、「よさ」をともに発見し、生み出し、確認しあうことへむけて、探究し、創造する共同探究者(co-researcher)、共同創造者(co-creator)になること、以上のようなかかわりさしています。

本巻は第67期の研修員8名の論文を中心としています。平成25年4月に入所して、自らの実践を振り返り、自ら自身をも振り返って、本当の教育がどういうものなのかを、「1から」考え直すことになったと思います。その結果、どの研修員も、リナルディの言う「聴き入ること」の難しさと大切さを身にしみて実感されたことと思います。今後のさらなる発展を願う次第です。

(2015年3月31日)